

<株式会社エフエム東京 第 477 回放送番組審議会>

1. 開催年月日：令和 3 年 4 月 6 日（火）
2. 開催場所：エフエム東京 本社 11 階 JET STREAM 大会議室
3. 委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名 社内 0 名）

◇出席委員（5 名）

ロバート キャンベル 委員長

川上 未映子 委員

松田 紀子 委員

佐々木 俊尚 委員

山口 真由 委員

◇欠席委員（1 名）

秋 元 康 委員

◇社側出席者（8 名）

唐 島 代表取締役会長

黒 坂 代表取締役社長

西 川 取締役副社長

小 川 常務取締役

内 藤 執行役員編成制作局長

延 江 編成制作局ゼネラルプロデューサー

若 杉 編成制作局制作部長

高 橋 編成制作局編成部制作部プロデューサー

◇社側欠席者（1 名）

宮 野 編成制作局次長 兼 編成部長

【事務担当 内藤放送番組審議会事務局長】

4. 議題：番組試聴（約 29 分）

『Skyrocket Company』

3 月 11 日（木）17：00～19：48 放送のダイジェスト

《議事内容》

議題 1:最近の活動について

■2021 年 4 月春の番組改編について

別紙資料

■TOKYO FM 4 月マンスリーキャンペーン「東京ラジオ」

TOKYO FM では、4 月 5 日（月）～4 月 30 日（金）の 1 ヶ月間、マンスリーキャンペーン「東京ラジオ」を展開しています。

2020 年 4 月に開局 50 周年を迎えた TOKYO FM はこの 4 月で開局 50+1 年。2021 年は、次の 50 年に向けて新たな一步を踏み出す 1 年となります。これからも、東京で生活するあなたの“Life time audio”でありたいという思いと、東京で新しい 1 年を踏み出す人への応援を込めた春のステーションキャンペーン「東京ラジオ」。リスナーの日々をいろいろな角度から豊かにする企画を実施し、身近な“ラジオ=パートナー”であることをメッセージしていきます。

キャンペーンタイトル「東京ラジオ」の題字は、「スナック ラジオ」（毎週土曜 16:00～放送中）で店主をつとめるリリー・フランキー氏による書き下ろしです。リリー・フランキー氏には、TOKYO FM の各番組への出演していただく他、4 月 29 日（木・祝）、30 日（金）に放送する各ワイドを横断した特別番組の中で放送するラジオドラマ「東京ラジオ」の脚本を担当していただきます。



現在、平日各ワイド番組では、「東京ラジオ」をテーマに、それぞれ東京生活を応援する企画を展開しています。メッセージを寄せてくれたリスナーには、「東京ラジオ」オリジナルステッカーと、TOKYO FM オリジナルステーションナリーを抽選でプレゼントしています。

【委員の意見および社側説明】

(「○」委員意見／「■」社側意見)

○番組改編資料の『News Sapiens』はとてもおもしろそうだ。出演者が刷新されたようだ。これは日替わりで毎週ゲストが出演するのか。山極先生など、大変興味深い。

■基本的に各曜日でご担当頂く。山極先生は月に 2 回出演予定。

○朝の『ONE MORNING』は出演者変更したが、構成などにも変化はあったのか。

■この番組はニュースが中心の番組だが、これまで以上に生活者目線での情報提供を行っていく。リスナーにとってそのニュースが一体どういう影響があるのか、もちろんこれまでもそう努めてきたが、より一層、生活にどのような影響があるのか、その影響はどんなものがあるのか、そういう身近なものを大切に伝えていく。

○新出演者ユージさんがワクチンパスポートを紹介していた回は、確かにニュースで抽象的な事象として聞くよりも、私たちの生活にとってそれがどうなるんだっていう視点が明確に伝わる身近な作りになっていて良いと感じた。

議題 2 : 番組試聴

【番組名】

『Skyrocket Company』

【放送日時】

3月11日(木) 17:00~19:48 放送のダイジェスト

【番組概要】

本日ご試聴いただくのは、平日月～木 17時から放送中のワイド番組『Skyrocket Company』のダイジェストです。この番組は、“明日への狼煙をあげるラジオの中の会社”をコンセプトに、パーソナリティのマンボウやしろ氏を「やしろ本部長」、浜崎美保氏を「浜崎秘書」、リスナーを「社員」と呼んでお届けしています(2014年スタート)。日々扱うテーマを会議の「議題」と呼び、寄せられた書き込みに本部長が「ハンコ!」と言いながら社判を押しています。(※書き込み=番組専用の掲示板/投稿システムを採用しています。)

働く人たちの応援を掲げ、扱うネタも実際に職場や仕事上で身近に起こることを中心に設定。マンボウやしろ氏が平日夜に放送中の10代向けワイド番組『SCHOOL OF LOCK!』で、番組開始の2005年から2012年まで「やしろ教頭」をつとめたこともあり、当時のリスナーが卒業し働く世代となり、その受け皿にもなっています。

本日ご試聴いただく、3月11日の放送回では、メッセージテーマ(議題)を「私の10年案件～忘れたい事、忘れたくない事」としました。マンボウやしろ氏は、2011年当時、『SCHOOL OF LOCK!』でやしろ教頭をつとめていたこともあり、東日本大震災にラジオを通じて毎日向き合い、時には、現地に赴き被災地に住む10代のリスナーを直接励ますこともありました。東日本大震災から10年が経った今、『Skyrocket Company』という番組がメディアの一つとして何ができるかを考えた時、多くのメディアが「あの震災を忘れない」というメッセージを伝えており、それはもちろん過去の教訓という意味で間違いではないのですが、一方で、忘れたい記憶として持っている人もいるのではないかと、定型句のように「忘れちゃいけない」と言っているものなのか?という問題意識を持ちました。そこで、震災からの「10年」という時間にフォーカスし、メッセージテーマを「私の10年案件～忘れたい事、忘れたくない事」に決めました。10人いれば10通りの10年を歩んだはず。番組では一人ひとり、色々な10年、それぞれの10年に寄り添う事を心がけて放送に臨みました。

【委員の意見および社側説明】

(「○」委員意見／「■」社側意見)

○大変面白く拝聴した。震災の被害とは何だったのか、僕自身も現地を訪れたりフォローし続けていて、いろいろ考えると、実にグラデーシンの多い災害だと思う。例えば最近だと、熊本地震とか集中豪雨とか、様々な災害があったが、多くは局所的であって、その場所の人は被災者であり、他のエリアの人は支援をする側であるというようにくっきり分かれる。東日本大震災に関しては、当事者中の当事者である津波被災者、あるいは、今もなお続いているが、福島原発帰還困難区域に住んでいる人たちと、そこから荒廃地の東北周辺、さらには首都圏、そして西日本というふうに、ずっと全部つながってグラデーションがある。

○震災の後に、何度も聞いて、そうだよなと思ったのが、例えば、千葉の舞浜とか浦安の人たち。あの辺は、実は災害被害が非常に大きくて、家の床が傾いてしまったりとか、道路が噴出して穴が開いたりとか、いろいろなことが起きたけれど、自分たちが被災者であるということを言いにくかったという。なぜかという、それを言ってしまうと、津波被災者の人たちとか、福島の人たちに申し訳ないからだと。私たちは大したことないですからと。でも、本当はそうではなくて、みんなそれぞれの場所で、それぞれつらかったはず。東京にいた人たちだって家に帰れないとか、大変な目に遭った人もたくさんいたはずで、他にもいたところでたくさん被害があったのに、これをメディアでどう報じるかということを見ると、テレビというメディアはすごく大きな物語になってしまう。

○震災後、報道に携わっているディレクターと喋っていると、彼らがよく言っていたのが、「復興が進んでいる」と描くと、「いや、進んでいない」と怒られるし、「進んでいない」と描くと、今度は「いや、そんなことはない。もう進んでいるんだから、いつまでも被害者扱いしないでくれ」と怒ると。それはなぜかと言うと、結局テレビというメディアが、ひとつの大きな物語に集約させないといけないう、ある種の共通認識みたいなものが我々にある。そこからこぼれ落ちるものを描くと、「それはこぼれ落ちすぎだ」と怒ってしまうという。そういう不思議な構図があるのかなと。

○ラジオはもっとパーソナルなメディアなので、そこがちゃんと届けられるはず。だから試聴番組の中の錦糸町の TSUTAYA の店員さんに飴玉をもらったみたいな話も、これも例えばテレビで大々的に震災の日にやったら、「もっと大きな被害がたくさんあったから、そっちをやるべきだ」というふうに怒る(感じる)人が多分出てくる。そこを怒らないで、「そうだ、あのとき、こういう小さな物

語があったよね」と思えるのが、多分ラジオという空間の、すごく良い所なんじゃないかと思う。じゃあ、インターネットはどうなのか考えると、これはなかなか難しい。すごくパーソナル。ラジオ以上にパーソナルなメディア。しかし一方で、パーソナルな空間同士が容易につながって、パブリック空間につながりやすい。内輪の話を内輪で喋っているだけだったのに、気がついたらそれが **Twitter** で拡散して、世界中から見られるようになって炎上したみたいなケースはたくさんある。パーソナルなはずなのに、パブリック空間に容易にさらされることによって、ある種の戦闘状態に陥ってしまう不安を常に抱えているメディア。

○ラジオは炎上しにくい。なぜかという、聴いている人はネットよりもたくさんいるかもしれないけど、一方でその空間っていうのはパーソナリティとリスナーの間で閉ざされた親密な空間。その親密な空間の居心地の良さは、多分僕はラジオの本質なんじゃないかこの審議会でもずっと言い続けている。そういう意味で言うと、この小さな物語を、いかにそれぞれのパーソナルな物語として作り、それを届けるか。しかも、それは別に大きな物語につながる必要なんか何もなくて、それを聴いている人たちの間で密やかに、ささやかに共有されれば、それでいいと思う。そこが多分ラジオの本質じゃないかというふうに考えると、今聴いたマンボウやしろ氏の番組のやり方は、まさにパーソナルな親密空間のなかで物語を小さく共有していくということを作ろうとしている所が、僕は非常に共感を得ました。こういう番組をもっと作ってほしいなど、個人的に思います。

○震災のこの内容の意義に関しては素晴らしいと思う。最初、音楽もない所から始まって、ストレートに個人が個人に向かって本音を話すぞという、そういう気合いを感じた。ただ、番組の演出について質問だが、浜崎秘書という女性の方を据えていて、一応固有名を与えているが、見事なまでにスマートスピーカーみたいだった。笑いごとじゃなくて、見事なまでに「ええ」と「はい」と「うん」しか言わなかった。この3つ。これは決めているのか？

■いえ。そういうわけではない。彼女が役割を持つコーナーもあったりする。ただ、今回に関しては、やしろ本部長主導のトークになっていた。

○今回というのは、このテーマだったからということか？ 普段は意見を言うのか？

■意見を持っているときは、当然話をしている。

○普段は対話をしているということだが、今回の番組はバランスが異常。カウントしていたが「ええ」と「はい」と「うん」しか言っていない。あとは、エピソードを読み上げるだけ。人間という演出ではなく、スマートスピーカー（AI）。女性の音声を使ったような使い方。なんでこういうふうにしたのか。例えば、バーチャルアシスタントの音声問題のジェンダー問題っていうのがある。基本的に、心地良さと快感があり、潜在的な先行が女性の声に合ってしまうっていうのはある。それをどうしていくのも、これから問題になっていく。愛想良く従順で、意見を言わないで自動的であるというものと、女性という秘書というこの3つを使って演出することは、制作側の意識をすごく問われる。1回の番組でも問われる機会になると思う。

○森（喜朗さんの）発言とか二階（俊博幹事長の）発言とか、そういうことが今、すごく敏感になっている。世間がこれまでの常識とか構図みたいなものがおかしいと思い始めているなかで、マンボウやしろ氏が個人的なことを、パーソナルに言っていくときに、最後のほうは、彼が間違いながらも、ためらいながらも自分の目線で話していくということが、ずっとループになっていて。最後は、飲み屋でおじさんが喋っているようにしか聞こえなかった。一方で、浜崎秘書は「うん」「はい」「ええ」「はい」だけ。本当に何を聴いているのだろうと思った。

○今、この放送を聴いて、男の人がバーッと喋る、「ええ」「うん」と女の人が受ける、この構成で30分聴いて、違和感を覚えない人がいたら問題だ。こういう所に古さや、意識の低さが出る。1回聴かれて判断されるっていう局面があるのだから、注意して、どういうふうな意図を持って演出しているのかを、明確に1回1回緊張感を持って臨んだ方がいい。

○この番組は初めて聴いたが、ラジオは非常にパーソナリティの人格とか価値観みたいなものが滲み出る媒体だと常々思っているので、マンボウやしろ氏も、本当にその1人だと感じた。社員と呼んでいるリスナーの方からの声に対して、しっかり自分の言葉で受け止めて、噛みしめて、受け流すわけではなくて、自分のなかの真の言葉みたいなものを探しながら、話している感じが、非常に心地良いなと思った。

○先ほど、他の委員から意見のあったAIっぽい感じっていうのは確かに若干気になったが、そもそも、私はずっとこの番組を聴いている訳でないので、普段秘書がどういう話をしているのかは、情報がなく何とも言えない。しかし本当にジェンダー問題みたいな所で言うと、どうしても男性がメインで、女性がアシスタントという構図が非常に多くて。多少それが気になる時はある。御社だけじゃな

くて、他のラジオ局を聴いている時も。女の人がアシスタントで、男の人の補佐をする、今までは当たり前で気にならなかったのが、急に気になり出した。そう
いった声をチラホラ聞くようになったなというのを実感として感じるようになったので、そういう刷り込みや思い込みと結びつけて聴いてしまったからかも
しれない。

○男女が逆転しているような形で、女性がメインで男性が補佐みたいなもの
もあっていいと思うし、そもそもそういう性別みたいな所を取っ払った
感じでやるのでも、非常に良い番組が作れるのではないかなとは思った。

○Twitter で、この番組を検索してみたが、リスナー社員の方が毎回の放送をす
ごく楽しみにしていて、「お疲れ様でした」と声をかけ合う感じが、先ほど別の
委員からもあった「コミュニティができていく」というものなのかなと。それは
今後すごく番組を支えていく力になると思うし、いろんな音声コンテンツが台
頭しているなかで、この時間でこういう盛り上がりを作れることは、多分リスナ
ーにとっても、仕事が終わってこのラジオを聴くというひとつの生活のリズム
になっていると思う。このコミュニティをもっともっと活性化していくとい
うか、巻き込んでいくような形で進めていけば、さらに看板番組になって、根強い
人気を作られると感じた。

○すごく面白く聴いた。一番良いなと思ったのは、忘れてはならないというのが、
東京から東北に対するひとつの義務感になってしまっていて、罪悪感があって、
それが私たちの気持ちを重くしてしまっている所があるというのを見事に喝破
していた部分。いつの頃からか、私も確かに東京で地震を経験したはずなのに、
何かに追いやられて当事者と言えなくなった。当事者と当事者の間の大きな溝
があるっていうのは、ジェンダーにしろ、人種にしろ、今いろいろな所で起こっ
ている問題。この溝にアプローチするっていうのは、非常に感銘を受けた。

○特に良かったのは、入社式のエピソード。当事者として私たちが“この日に”
地震を語っていいんだっていうことを思い起こさせてくれたのは、私は何より
も評価すべき点だと思う。その観点で少し気になるのは、やしろさんの「僕が言
うことではありませんが」という断り。言葉選びが難しい。「地震が東北で起き
たんだ、自分は当事者じゃないんだ。あの立場だったら…」。そうおっしゃるの
はすごく分かるが、せつかく良いエピソードが集まっていて、当事者として関わ
れるのもう少し、当事者なんだって言ってしまってよかったと思う。そうすれ
ば、もっと私も当事者なんだ、この地震に対して、ものすごく重たい義務感と罪
の意識を感じなくて済むんだっていうふうに聴けたのじゃないかと思う。

○本部長が「はい、ハンコ」と言っていたのに大変強い違和感を覚えた。話をずっと聴いて、自分の話をして、良し悪しで「これは良い」「合格」とか言うことは、ドナルド・トランプの「アプレンティス」っていうテレビ番組が昔あったが、「君はクビだ」「君は採用だ」と、1人で判断する枠組みのようだ。ずっと「ハンコ!」「はい、これハンコです!」って言う威張り散らした管理職の男性がいて、「はい」って秘書が「社長、時間ですよ」みたいな感じになるということ是不愉快。

○忘れたいことと、忘れたくないことをテーマにしていることは、忘れたいことがあってもいいということを提示しているのには理解するが、いざ番組を試聴するとダイジェストだったせいもあるが、正面から本当に忘れたいことを取り上げていなかった。

○飴玉をくれた方を神様だと表現したことに大変違和感を覚えた。憶測だが、この番組は毎日放送しているので仕込みをしていないのではないか。東北の被災地の話をするのに震災特番のように現地に足を運ばず、リアリティのない話なのではないか。

■この番組がスタートしたのが、2014年。今から7年前に、ラジオの中の会社という設定で、本部長と秘書にしたが、確かに時代は、そこから大きく変わってきているなというのは、本当にみんな認識している。

今回の震災というテーマを、毎日の放送と同じように通常のフォーマットに当てはめ、「ハンコ!」みたいな、演出になったことに反省点はあるかなというふうに思う。

■ハンコを押ししたり、押さなかったりで、合否が分かれるようなことはしていない。リスナー的には、「メールをくれてありがとうございます」という言葉の代わりみたいな形で使われている音演出の一環で、「あなたはハンコを押しません」「ダメです」というような○×が付くようなものにはしていないのは認識されていると思っている。

■先ほどのジェンダー的なご指摘については、2人の生放送をやりながらの波長みたいな所で、やしろ氏が1歩出ると、浜崎氏がバランスを取って1歩下がったりという、2人のやじろべえみたいな感じが常にあって、今回はやしろさんが自分の喋りで行かせてもらうよ、というスタンスを感じたから、彼女はそれを支援するほうに回った。というのも、2011年3月11日の震災の時、やしろ氏が、これは資料にもあるが、『SCHOOL OF LOCK!』という番組を担当していて。放

送でも毎日被災地の 10 代、また、被災地以外の「何かできないか」と気持ちを募らせる 10 代と向き合っていて、当時やしろ氏は、プライベートも含めて、何度も東北地方に足を運んでいる。なので、ちょっと思い入れが強すぎたというのがある。浜崎氏は当時ラジオをやっていたわけではないので、少し遠慮したというか、やしろ氏が発言しやすいように自ら抑えたと思う。

■この放送回ではない回を試聴していただくべきだったかもしれない。

6.議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送:番組「ドライバーズインフォ」

4月24日(土)5:55~6:00放送

② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <https://www.tfm.co.jp/>